立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院学生研究
２０１８年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院　現代心理学研究科　映像身体学専攻		
研究代表者（2019年3月現在のものを記入）	在籍課程・学年・学生番号	氏　名	
	□博士前期課程　年 ☑□博士後期課程３年　16WY001J	早川　由真　印	
指導教員	所属・職名	氏　名	
	現代心理学部・映像身体学科・教授	中村　秀之　印	
自然・人文・社会の別	自然　・　人文　・　社会	**個人・共同の別**	個人　・　共同　名
研究課題	リチャード・フライシャー監督作品における画面上の身体の存在論		
研究組織（研究代表者・共同研究者）※2019年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年	氏　名	
	現代心理学研究科・映像身体学専攻・博士課程後期課程３年	早川　由真	
研究期間	２０１８　年度		
研究経費（1円単位）	（支出金額）　199,772円　／（採択金額）　200,000円		

研究の概要（200～300字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究はリチャード・フライシャー監督作品を対象とし、画面上の身体イメージや音を個別具体的に分析することで、映画的身体というものの特異な在り方を解明する研究である。とりわけ、従来の議論では軽視されてきたイメージや音の質感[grain]の問題も踏まえつつ、主に1968年～1975年の時期における作品（『10番街の殺人』、『見えない恐怖』、『マンディンゴ』）に見られる映画的身体の特異な在り方を明らかにした。同時に、テクストの分析にあたって、映画的身体の原理にかかわる諸要素についての理論的検討もおこなった。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　リチャード・フライシャー　〕〔　映画的身体　〕〔　存在論　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究の大きな目的は、現実にある身体ではなく、舞台上にある身体でもなく、映画において画面上に映しだされる身体とはどのような存在なのだろうか、という問いを明らかにすることである。映画における画面上の身体の存在論的な問題にかんしては、19 世紀末に映画が誕生して以来、様々な議論がなされてきた。たとえばヴァルター・ベンヤミンやスタンリー・カヴェルのテクストは、画面上の身体の在り方を周囲の諸物体との関係において問題にしたものだと言える[注 1]。しかし、画面上の身体は、俳優のイメージや役柄の像、およびキャラクターとしての機能、あるいは個々のショットにおけるフレーミングやモンタージュ、俳優演出や演技など、より多様で複雑な要素によって規定される存在であるはずだ。

昨年度までの研究によって、このように多様で複雑な要素によって原理的に規定されている映画的身体という存在を考察するうえで、リチャード・フライシャーの作品に重要な手がかりが存在することが明らかになってきていた。たとえば『絞殺魔』における〈声〉の不可能な身体化や、〈白の存在〉へと至る身体の特異な在り方、あるいは『10 番街の殺人』における呼吸の主題や、それにともなう呼吸音の使用法などである。そこで私は、これまでの研究の経緯を踏まえつつ、フライシャー作品を対象にテクスト分析をおこない、それらの作品における映画的身体という存在の特異な在り方にさらに迫っていった。今年度の具体的な成果は４つ挙げられる。

①『10 番街の殺人』を主な対象とした学会発表を論文化し、映像身体学専攻の紀要に掲載された。(様式３－①－(1))
②『見えない恐怖』を対象に学会発表をおこない、論文化して学会誌『映像学』に投稿した（査読結果待ち)。
③『マンディンゴ』を対象とした学会発表をおこなった。(様式３－④－(1))
④博士論文中間報告書を作成・提出し、研究科に受理された。

以下、上記①～③の研究成果についての概要を記す。

【①『10 番街の殺人』を対象とした研究】(様式３－①－(1))

『10 番街の殺人』(*10 Rillington Place*, 1971 年）を対象としたこの研究では、昨年度学会にて発表した内容の論文化をおこなった。論文の概要は以下の通りである。トーキー化以後、映画において画面上の身体は視覚的な身体イメージ（映像）と聴覚的な声（音）という２つのレヴェルで存在することになった。したがって、映像と音の分離は存在論的な問題を引きおこす[注 2]。この論文の目的は、『10 番街の殺人』における映像と音の関係を分析することで、声とは異なる呼吸音という要素のもつ意味を明らかにすることにある。

まず、この作品における即物的な音について指摘し、クロース・マイキングを用いたフライシャーの「客観的」アプローチを確認した。そのうえで、ミシェル・シオンの〈流出のパロール〉概念[注 3]を手がかりに、ふたりの主要登場人物、すなわちクリスティとエヴァンズの喋り方や身振りを検証し、理路整然として目的を志向するクリスティと支離滅裂で不安定なエヴァンズというそれぞれの存在様態を浮かびあがらせた。そして、あくまで声によって統制された身体に結びつくクリスティの息遣いに対して、エヴァンズの身体を暗示することから逃れていく無名の音としての呼吸音が表れていることを明らかにした。呼吸音は原理的に、個別化された主体の「死すべき運命」をもつ身体から逃れている。それは独自の生命を生きる音、無名の生命のしるしであり、身体を暗示するにとどまらず、あくまで映像と音の分裂を際だたせるのだ。

[注 1] ヴァルター・ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」久保哲司訳、浅井健二郎編訳『ベンヤミン・コレクション①近代の意味』ちくま学芸文庫、1995 年、604-11 頁。および、スタンリー・カヴェル『眼に映る世界―映画の存在論についての考察』石原陽一郎訳、法政大学出版局、2012 年、70 頁。
[注 2] メアリ・アン・ドーンは、映画においてはトーキーとともに出現した声によって「幻想的身体」が再構築され、「有機的に統一された」身体が表象されるようになり、「台詞を特定の個人に帰する」ことができるようになったと指摘する。メアリ・アン・ドーン「映画における声----身体と空間の分節」松田英男訳、岩本憲児・武田潔・斉藤綾子編『「新」映画理論集成②----知覚／表象／読解』フィルムアート社、1999 年、312-3 頁。
[注 3] Michel Chion, *La toile trouée* (Paris: Editions de l'Etoile, 1988), 98.

研究成果の概要　つづき

【②『見えない恐怖』を対象とした研究】

『見えない恐怖』を対象としたこの研究では、学会にて発表した内容を論文化し、学会誌『映像学』に投稿した。査読結果待ちであるため「様式３」には記載していないが、「顔のない殺人者―リチャード・フライシャー『見えない恐怖』における〈盲者の視点ショット〉とキャラクターの生成」と題されたこの論文の概要は以下の通りである。この論文の目的は、縫合理論[注4]を手がかりに、リチャード・フライシャー『見えない恐怖』（*See No Evil*, 1971年）における不可解なショットの分析を通じて、殺人者というキャラクターの生成（およびその不成立）のメカニズムを明らかにすることだ。このフィルムにおける不可視性を活かしたサスペンスは高く評価されてきたが、クライマックスにおいてキャメラが水中からジャッコを見上げる不可解なショットにかんしては、暴力や死の不可視化に関連しているにもかかわらず、これまでに論じられてこなかった。そこでまず、盲目の主人公・サラの「視点」を示すかのようなこのショットを、エドワード・ブラニガンの議論[注5]を手がかりに、〈盲者の視点ショット〉ととらえる視座を導きだす（第１節）。次に、縫合理論をキャラクターの生成という観点から整理しつつ、顔の見えない殺人者がクライマックスの直前でブーツをわざわざ脱ぐために、ブーツとジャッコの顔がいちども同一画面に映りこまないという事実を指摘する（第２節）。そして、殺人者の現れ方を分析していく過程で、ブーツとジャッコの顔の結びつき、すなわち〈身体の縫合〉には綻びがあり、ジャッコは殺人者というキャラクターとしてうまく成立しないことを明らかにする。最終的に、水中からのショットにおいては不可視であるはずの殺人者の顔が不在（無）として画面上に露呈しているという複雑な事態が浮かびあがってくる。観客はそこで、不可視であるはずの殺人者の顔を、あくまで見えないものとして、画面上において見てしまうのである（第３節）。

[注4] ジャン＝ピエール・ウダール「縫合」谷昌親訳、岩本憲児・武田潔・斉藤綾子編『「新」映画理論集成②----知覚／表象／読解』、フィルムアート社、1999年。(Jean-Pierre Oudart《 La suture 》, *Cahiers du cinéma* 211 (Avril, 1969), 36-39 ; 212 (Mai, 1969), 50-55.)
[注5] Edward Branigan, *Point of View in the Cinema: A Theory of Narration and Subjectivity in Classical Film* (Berlin: Mouton Publishers, 1984), 103-108.

【③『マンディンゴ』を対象とした研究】(様式3-④-(1))

この研究では、『マンディンゴ』を対象に学会発表をおこなった。発表の概要は以下の通りである。この発表では、リチャード・フライシャーが監督した『マンディンゴ』（*Mandingo*, 1975 年）が、映写機から投影された光の像がキャラクターとしての同一性を備えていくプロセスそれ自体をきわめて繊細な光の描写によって提示した作品であることを明らかにした。19 世紀アメリカ南部における黒人奴隷のプランテーションを描いたこの作品は、光の描写という観点から充分に論じられてきたとは言いがたい。公開直後のレビューでは、人種問題というデリケートな題材もあり、大胆なセックス描写や暴力が反感を買い、物議をかもした。そのため、公開翌年の『ムービー』紙に鮮やかな批評テクストを寄せたアンドリュー・ブリットンは、そうした批判的なレビューに反論しつつ、作品を擁護するために、まずアメリカ文学が伝統的に描いてきた「恐怖の家」の主題との関連を指摘し、この作品の重要性を強調することから書き始めなければならなかった[注6]。1998 年に出版され、盟友ブリットンに捧げられた書物の一章を『マンディンゴ』に割いたロビン・ウッドも、不当な低評価に対する「再評価」をひとまずの目的として掲げざるを得なかった[注7]。ところが、これら２つの優れた批評テクストは、どちらのテクストもキャラクターたちの同一性を前提としており、光の描写とキャラクターたちの同一性との関係については充分に論じられていない。実は、この作品においては光の描写こそが根源的であり、キャラクターの同一性、ひいては人種や性の描写は、そうした光の描写によって導きだされるのだ。

この作品における光との関連では、蓮實重彦が「淀んだ茶褐色」の「根本的な逸脱性」という表現で、白さや黒さへと還元されない色調の微妙な領域について述べている[注8]。しかし、むしろ重要なのは、様々な色調が最終的に「白さと黒さの葛藤の物語」へと行き着いてしまうという悲劇的な事態である。映しだされた像がなんらかの同一性を備えていくプロセスとは、まさにそうした事態にほかならず、明らかにするべきはそうした微妙な光のグラデーションが、白や黒といった記号に収斂されていくメカニズムそれ自体なのである。この作品における身体たちは光の描写によって存在論的に規定されており、いわば光の描く身体の政治学としてこの作品を読み解く必要がある。肌の色、および性、さらに生命をめぐる問題は、この光の描く身体の政治学によって展開されていくのだ。この発表では、白昼の陽光のもつ役割に着目しつつ、最終的なカタストロフィへと至る道のりを、映しだされた像が同一性を備えていくプロセスとして読み解いていった。

[注6] Andrew Britton, “Mandingo,” *Movie*, no.22 (Spring 1976), 1-22.
[注7] Robin Wood, “Mandingo: The Vindication of an Abused Masterpiece,” in *Sexual Politics and Narrative Film* (New York: Columbia UP, 1998), 265.
[注8] 蓮實重彦「ドン・シーゲルとリチャード・フライシャー、または混濁と透明」『映像の詩学』ちくま学芸文庫、2002 年、284 頁。

研究発表（研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

①雑誌論文（1件）

(1)早川由真「声になるまえに――リチャード・フライシャー『10 番街の殺人』における呼吸音と身体」『立教映像身体学研究』第 7 号、2019 年、1-18 頁。（査読あり、単独論文）

②図書（0件）

③シンポジウム・公開講演会等の開催（0件）

④その他（1件、学会における口頭研究発表）

(1)早川由真「光の政治学--リチャード・フライシャー『マンディンゴ』における色調と身体」、日本アメリカ文学会東京支部 2019 年 3 月例会、慶應義塾大学、2019 年 3 月 23 日。（単独発表）